

教理研究院

サンクチュアリ教会およびUCIを支持する人々の言説の誤り(22)

教理研究院は、UCI（いわゆる「郭グループ」）側が広めている金鍾奭著『統一教会の分裂』の内容が、み言の改ざんや意図的ともいえる誤訳、文脈を無視したみ言引用などによる、虚偽のストーリー、であることを指摘してきました。今回は、『統一教会の分裂』が「真の家庭の分裂の原因が韓鶴子（142ページ）だと述べている、虚偽、を明らかにします。」

なお、これらの内容を総合的に理解し把握するためには、「真の父母様宣布文サイト（http://trueparents.jp）」の掲載文や映像をごらんください。

教理研究院

注、真の父母様のみ言および家庭連合の公式発表は「青い字」で、UCI（いわゆる「郭グループ」）側の主張は「茶色の字」で区別しています。

二十六、「真の家庭の分裂の原因が韓鶴子」という虚偽の主張にUCIは

(1) 真のお母様が「統一教会の重要政策などを自分勝手にしている」という虚偽の主張

① 信憑性のない「MHの陳述」

『統一教会の分裂』は、「創始

者（注、真のお父様）の最側近であるWの口からこぼれた話の内幕」であるとして次のように述べます。

「創始者は二〇〇九年一月一日未明に、文亨進ではなく文顯進が『神様解放圏戴冠式』に王冠を被るようになるだろうと語ったという。この言葉を受け

て真の家庭と最側近の幹部はその日、麗水に集まって非常対策会議を開き、創始者の心を変える秘策を立てたという。……韓鶴子は真の家庭を破壊して自殺すると創始者を脅かし……」（138ページ）

これは、虚偽の内容です。『統一教会の分裂』は、本来なら文顯進様が王冠をかぶるべきところを、真のお母様が「真の家庭を破壊して自殺する」と真のお父様を脅して文亨進様に代えたという話を「Wの口からこぼれた話」であると述べ、その情報元を次のように述べます。

「二〇一六、六、二、MHの陳述（MHの自宅）。MHにこの言葉を伝えた者は、WやPと緊密な関係があったKSだという。……しかしKSは後日、MHに語ったこの陳述を否認した」（138ページの脚注）

真の父母様宣布文サイトはこちらから↓



すなわち、「Wの口からこぼれた話」とは「MHの陳述」であり、さらに「この言葉を伝えた者」は「KS」であり、この「KS」が情報元だと述べます。ところが、伝言ゲームのように伝わったこの内容を、情報元の「KSは後日、MHに語ったこの陳述を否認」したとします。金鍾奭氏は「MHの陳述」が「かなり信憑性がある」（138ページ）と強弁しますが、脚注では情報元の「KSは……否認」したと悪びれることなく述べ、結局、この内容が、根拠薄弱であることを自ら暴露しているのです。

「真のお父様が（二〇〇九年一月一日未明に、文亨進ではなく文顯進が『神様解放圏戴冠式』に王冠を被るようになる）や、「真の家庭と最側近の幹部はその日（一月一日未明）、麗水に集まって非常対策会議を開き、創始者の心を変える秘策を立て……韓鶴子は真の家庭を破壊し

て自殺すると創始者を脅かし（た）」などという「MHの陳述」は、その情報元の「KS」自身が否認しているものであり、全く根拠がありません。

② 「万王の王神様解放権戴冠式」は「神様と真の父母様の戴冠式」である

二〇〇九年一月二十四日、真のお父様は「万王の王、神様何ですか？（「解放権です」）解放権です。神様だけが解放権戴冠式であり、別の人ではありません。先生が中心ではないのです。このようなことを、こういう理論を説明するその何かがなくなったら「解放式を先生が全てした。神様は従っていったー」と言えますが、そうではありません（「マルスム選集607-17」と語っておられますが、『統一教会の分裂』は140ページで同様のみ言を引用して次のように述べています。

「創始者は、『神様王権戴冠式』

……この行事は創始者の為のものではなく、誰の為の行事もなく、『神様だけの解放圏戴冠式』だというのである」（140ページ。注、太字ゴシックと圏点は教理研究院）

このように、「万王の王神様解放権戴冠式」は「創始者の為のものではなく、誰の為の行事もなく、『神様だけの解放圏戴冠式』であると述べますが、これは、虚偽の主張」です。

真のお父様は「万王の王神様解放権戴冠式」は「先生が中心ではないのです」と語っておられるだけであり、「創始者の為のものではなく、誰の為の行事もなく」などと語ってはおりません。

二〇〇九年一月十五日、真のお父様は韓国で行われた「万王の王神様解放権戴冠式」の場で、次のように語っておられます。

【写真参照】



2009年1月15日「万王の王神様解放権戴冠式」（天正宮博物館、U-ONE TVの映像）

「私たち夫婦が、畏れ多くも天から印を受け、神様の実体として立ち、万王の王戴冠式を執り行うこととなり、……縦的万王の王であられる神様の実体として万有を統治する横的万王の王、真の父母様の戴冠式」（『ファミリー』二〇〇九年三月号、5〜7ページ）

真のお父様が語っておられる

ように、「万王の王神様解放権戴冠式」とは「万有を統治する横的万王の王、真の父母様の戴冠式」であって、「縦的万王の王であられる神様の実体」として立っておられる真の父母様の「横的万王の王」の戴冠式でもあるのです。さらに、お父様は「私たち夫婦（お父様と真のお母様）」が「天から印を受け、神様の実体」として立ち、執り行うとも語っておられます。

ところが『統一教会の分裂』は、真のお父様が「神様だけが中心ではない」と語られたみ言の一部分を自分たちに都合良く解釈し、「万王の王神様解放権戴冠式」は「創始者の為のものではなく、誰の為の行事もなく、『神様だけの解放圏戴冠式』と述べています。これは「神様の実体として万有を統治する横的万王の王、真の父母様」の宣布のみ言を歪めている、虚偽の主張」です。

③真のお母様が「統一教会の重要政策などを自分勝手にしている」という虚偽

「統一教会の分裂」は「二〇〇九年一月十五日の『神様解放圏戴冠式』から九日後の二〇〇九年一月二十四日に創始者は、韓鶴子に底意のある話をした」(139ページ)として、真のお父様のみ言を次のように引用します。

「お母さんは、勝手にしようと思っただけなんです、勝手に動いてみるんです。お母さんはお母さんの行きたいままに行き、私は私の行きたいままに行くと言ったのです。私が朝、どれほど深刻だったでしょう。日が昇る前に日が消える真暗な世界、電灯の光が砂浜に映るような、ちょうどそういう気持ちで未明から発ちました。今日は大変革を成すだろうというのです。お母さんは勝手にしろ

というのです」(139～140ページ)

しかしこのみ言は、原典を忠実に訳せば以下のとおりとなります。

「お母様に(お金を)預けましたが、お母様がしつかりと握っており、お金を自分の思いどおりに使おうと思っただけなんです。思いどおりにしなさいというのです。『あなたはあなたが行きたいように行き、私は私が行きたいように行く』と言ったのです。私が朝、どれほど深刻だったでしょうか。日が昇る前に、日が沈んだ暗闇の世界、電灯の明かりが砂浜に映るような、ちょうどそういう心で早朝にたつたのです。今日は大変革をなすというのです。お母様、思いどおりにしなさいというのです」(マルスム選集607～11・12、翻訳は教理研究院、以下も同じ)

『統一教会の分裂』は、上記のみ言を自分たちの主張に都合良く書き換え、真のお母様が「統一教会の重要政策などを自分勝手にしている……その内幕を知る創始者は知っていて、それは深刻だというのである」(140ページ)と述べますが、これは「虚偽の主張」です。

原典に当たってみると、真のお父様は「お母様に(お金を)預けましたが、お母様がしつかりと握っており、お金を自分の思いどおりに使おうと思っただけなんです。思いどおりにしなさいというのです」と語っておられるのであって、このみ言を「お母さんは、勝手にしようと思っただけなんです、勝手に動いてみるんです」と訳すことはできません。これはみ言の改ざんであり、「お金」に関する部分を意図的に削除し、改ざんしています。

朝、どれほど深刻だったでしょうか」と語っておられますが、その「深刻だった」という意味については、『統一教会の分裂』は真のお母様が「統一教会の重要政策などを自分勝手にしている」からであると述べています。これはみ言の文脈を無視し、深刻な事実の意図を意図的にすり替えた悪意のある主張です。

真のお父様は次のように語っておられます。

「万王の王が何をしましたか? (神様解放権戴冠式です)」それは全体を話したものです。ここからひっくり返ります。皆さんは恐ろしいことが過ぎたことを知りません。先生は深刻なときなのです。ここに九番目で来て、十の峠を越えたのです。十数を越えて十二数を越えて十三数です。あと三年とどれほど残ったの? 三年三百何日? (マルスム選集607～9、二〇〇九年一月二十四日)

このように、真のお父様は「先生は深刻なときなのです。ここに九番目で来て十の峠を越えた」と語っておられます。すなわち二〇〇九年一月二十四日の早朝訓読会は、一月十五日に挙行した「万王の王神様解放権戴冠式」から十日目の朝を迎えた日であり、「十の峠を越えた」ときだったのです。そのため、お父様は「十数を越えて十二数を越えて十三数」を勝利しなればならない「深刻なとき」であると言われたのです。「万王の王神様解放権戴冠式」から「ひっくり返ります。皆さんは恐ろしいことが過ぎたことを知りませぬ。先生は深刻」と言われ、二〇一三年一月十三日の天

「深刻な場であるのに、皆さんたちは何ですか? ここ(ラスベガスの天和宮)に来て暮らす生活もそうです。お母様ならばお母様を中心に『先生がこうようにしてください』と私に言いますが、私はそこに従っていかないのです。今回、神様解放権、何ですか? (戴冠式です) この意義を知らなければ大変なことになるのです」(マルスム選集607～10)

このように、真のお父様は、「万王の王神様解放権戴冠式」の意義を知らなければ「大変なことになる」と語っておられるように、このみ言を語っておられるのは、撰理的に重要な峠を越えて勝利しなければならぬときだったのです。だからこそ、真のお母様が旧正月を迎えつつある天和宮での生活に対し、お父様に「このようにしてください

いけない」と語られたのです。お父様は「十数を越えて十二数を越えて十三数」を越えていく「深刻なとき」であったため、お母様にお金を全て預けられて、「あなたはあなたが行きたいように行き、私は私が行きたいように行く」……お母様、思いどおりにしなさい」と全面的に許可を出しておられたのです。

ところが、『統一教会の分裂』は改ざんしたみ言を用いて、真のお母様が「統一教会の重要政策などを自分勝手にしている」ので真のお父様は「深刻だった」というように意味を正反対にねじ曲げ、虚偽のストーリーによってお母様をおとしめようとしています。

(2)「真の家庭の分裂の原因が韓鶴子」という虚偽の主張

『統一教会の分裂』は、真のお父様が「真の家庭の分裂の原因が韓鶴子だと考える内心を

ほのめかした」(142ページ)と述べ、次のみ言を引用します。

「天国を開く道、真の家庭、文鮮明! (基元節まで) 四年数か月残っています。このときまでお母様が責任を果たさなければ、問題を起さるのです。そのため、大事に無事に私が責任を全て築いておいたので、これまでしたので、お母様も、私が悔しいと当たり散らしたりせず、拳を挙げて殴ったりしない限り全てが解決されます」(2012年「真の父母様御聖誕日記念出版版」のマルスム選集607～310、翻訳は教理研究院)

『統一教会の分裂』で金鍾奭氏は、真のお父様が「お母様も、私が悔しいと当たり散らしたりせず、拳を挙げて殴ったりしない限り全てが解決」されると語られたみ言を用いて、「創始者が悔しいと自分の拳で韓鶴子を

また、真のお父様は次のようにも語っておられます。

「このようにしてくだされば」とお願いされたとしても、お父様は「そこには従って

打たない以上、基元節は成功するという言葉(143ページ)であると歪曲し、「私」という人称代名詞を「創始者」に置き換えています。これは改ざんです。このように置き換えるのは、このみ言がお父様の「苦しい心情を吐露した」(143ページ)ものであると、誤読させるためです。

全体の文脈から見ると、この「私」という人称代名詞は「創始者」ではなく、「お母様」を指しています。すなわち、「私(真のお母様)が悔しいと当たり散らしたりせず、拳を挙げたり殴ったりしない限り」全てが解決でき、「お母様が責任を果たせる度数を終える」ことができるように、真のお父様は「責任を全て築いておいた」と言われているのです。よって、このみ言は、お父様の「苦しい心情を吐露」したみ言ではありません。

また、上述のこのみ言は『統

一教会の分裂』の226ページ

と249、250ページなどに掲載されており、このみ言が「韓鶴子について創始者が否定的に言及した内容」(226ページ)であり、かつ「韓鶴子の不従順」(245ページ)に関するみ言であるとして、随所に引用されています。しかし、このみ言は、基元節まで真のお母様が責任を果たすことができるように、真のお父様が「責任を全て築いておいた」という、愛のみ言であって、「苦しい心情を吐露」されたものではありません。

したがって、『統一教会の分裂』が、上記のみ言を自分たちに都合良く歪曲して、真のお父様が「韓鶴子の不従順」について指摘したみ言であるとか、あるいは「真の家庭の分裂の原因が韓鶴子」とほめかし、「韓鶴子について創始者が否定的に言及」したみ言であるなどと述べるのは、虚偽の主張にほ

かなりません。

(3) 「韓鶴子が創始者の血統に対して問題を提起した」という虚偽の主張

『統一教会の分裂』では、二〇〇九年二月二十八日の早朝訓読会で「創始者は、韓鶴子との葛藤を暗示する言及をした」(148ページ)と述べており、次のみ言を引用します。

「お母さんも三十八度線を越えなければならぬ。あなたはあなたが行くべき道があり、私は私なりに行く道があると行ってみなさい。……『先生が墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたか』などと言っている。……原理を解釈すらいけない人々が、先生が純血か、何の血か、先生の血がどうだとか、墮落前に血を汚したのか」(148ページ)

さらに250ページにも二〇〇九年二月二十八日のみ言を記載しており、「韓鶴子の不従順」(245ページ)を裏づけるみ言の一つであるとしています。すでに教理研究院はこのみ言について「反論済み」ですが、再度、下記に主な内容を要約します。真のお父様は二〇〇九年二月二十八日に次のように語っておられます。

「私」が神様の代身として純潔、純血、純愛の表象となつて鏡とならねばならないのに、(皆さん)そのような鏡になっていきますか?……『先生は墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたのか?』というのです。皆さんは、そのように言いますか?……原理を解釈することもできない人々が、何、先生は純血か、何の血か。私はそれを知っているのです、この場に

『統一教会の分裂』は上記のみ言を用いて、真のお父様が「韓鶴子との葛藤を暗示」されたと述べ、それは「韓鶴子が創始者の血統に対して問題を提起した」(148ページ)からだと主張します。

しかし、これもみ言の改ざんによる虚偽の主張です。マルスム選集608巻には、次のようにあります。

「原理を解釈すらいけない人々が、先生が純血か、何の血か。私はそれを知っているのです、この場に来ないようにしようと思いましたが、そこに行かないようにしようと思いましたが、汚らわしいことを知っているのです。何、先生の血がどうだとか、墮落前に血を汚したのか」(マルスム選集608-289、二〇〇九年二月二十八日。注、青い字は教理研究院による翻訳で、『統一教会の分裂』が削除している部分)

来ないようにしようと思いましたが。そこに行かないようにしようと思いましたが、汚らわしいことを知っているのです。何、先生の血が、どうしたというのですか。墮落の前に、血を汚しましたか?……数多くの女たちが私をゴロツキにしようとして、墮落させようとするので、(私は)鍵を掛けて暮らしました。お母様に尋ねてみてください。……うちの家で何代の孫の中で、お母様の代身として育ちうる孫娘がいつ生まれるか?それが私の心配なのです。七代を経ても難しいだろうと考えるのです」(マルスム選集608-288-292)

このみ言は、韓国のバイブルリッジリゾートの天情苑で、朝の訓読会のときに語られたものですが、真のお母様に対して語られたものではなく、その場に参席した食口たちに対して語っておられるという点が重要

このように『統一教会の分裂』は、「……私はそれを知っているのです、この場に来ないようにしようと思いましたが、そこに行かないようにしようと思いましたが、汚らわしいことを知っているのです。何、……」という部分を、意図的に削除し、隠蔽しているのです。

真のお父様は「原理を解釈すらいけない人々」が「先生が純血か、何の血か」などと言っていることを知っておられるので「この場に来ないようにしよう」と思われたと語っておられます。すなわち、「原理を解釈すらいけない人々」とは真のお母様のことではなく、「この場」に集まった食口たちのことを指しているのです。したがって、このみ言は、お母様が「先生が純血か、何の血か」などと「創始者の血統に対して問題を提起」し「創始者の血統を疑っている」(110ページ)ものではなく、

「二〇〇八年二月二十八日創始者は韓鶴子との葛藤を暗示しながら、誰かが創始者の血統的アイデンティティを否定していることに言及した。……二〇〇八年二月に創始者にこの話をする

ことができる人は唯一人、韓鶴子しかいない」(109、110ページ)

『統一教会の分裂』は、二〇〇九年二月二十八日に語られたみ言を、二〇〇八年二月二十八日に語られたみ言であると日付まで捏造して、真のお母様が「創始者の血統的アイデンティティを否定」なさるという虚偽のストーリーを述べている

です。

真のお父様は『平和神経』について語られながら、食口が「神様の代身として純潔、純血、純愛の表象となつて鏡」とならなければならぬのに、「そのような鏡になっていきますか？」と尋ねておられます。その流れの中で、「先生は墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたのか？」というのです」と語っておられるのは、『平和神経』を中心とした「純潔、純血」に関する話であり、「先生は……」という言葉で分かるように、これは、真のお母様が「創始者の血統に対して問題を提起した」ことに対する、お父様の「葛藤を暗示する言及」ではなく、食口たちがそのように語っている言葉として、それについて述べておられるのです。

つまり、食口が「先生は墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたのか？」と語っており、先生も純潔ではなく「六マリ

ヤ」のようなことがあると思っ
ているようだが、事実はそうではなく、「皆さんは、そのように言う（注、純血のこと）自信がありますか？」と述べられ、「原理を解釈することもできない人々が、何、先生は純血か、何の血か」と言っているが、それはとんでもない話だと語っておられるのです。

続けて真のお父様は、「数多くの女たちが私をゴロツキにしようと、墮落させようとするので、（私は）鍵を掛けて暮らしました。お母様に尋ねてみてください」と語られています。つまり、お父様がいかげんに生きておられないという事実の証人。は真のお母様であられ、そういう意味で「お母様に尋ねてみてください」と語っておられるのです。お父様の証人となるお母様が、「先生は墮落の血を受けたのか、きれいな血を受けたのか？」とお父様に対して疑って質問することはあり

えない話です。もし、お母様がお父様を疑っておられるという話であるなら、「お母様が証人である」と、お父様が語られることはありえません。

そして、真のお父様は「うちの家で何代の孫の中で、お母様の代身として育ちうる孫娘がいつ生まれるか？ それが私の心配なのです。七代を経ても難しいだろうと考えるのです」と語られ、真のお母様を証ししておられます。すなわち、お母様ほどの女性は何代を経ても現れないくらい、お母様は素晴らしい方だと証ししておられるのです。

以上の内容をまとめると、『統一教会の分裂』は、「創始者の血統を疑っているという言及は、統一教会の分裂の原因を理解するのに重要な手がかり」（110ページ）であり、「二〇〇八年二月に創始者にこの（注、真のお父様の血統を疑う）話をすることができると人は唯一人、韓

鶴子」であると述べています。さらには二〇〇九年二月二十八日の訓読会でも、「創始者は、韓鶴子との葛藤を暗示する言及」をし、それは「再び、韓鶴子が創始者の血統に対して問題を提起した」からだと言及しています。

しかしながら今回検証したように、これらの主張は『統一教会の分裂』が真のお母様をおとしめるため、み言の意味を恣意的に解釈し、改ざんして作り上げた虚偽のストーリーです。お母様が「創始者の血統を疑っている」ことが「真の家庭の分裂の原因」であったという、事実と反することを述べているのです。

したがって『統一教会の分裂』は、真のお母様に対する絶対信仰を失わせるために改ざんしたみ言でつづられた、歴史に残る悪書にほかなりません。このような『統一教会の分裂』にだまされてはなりません。